

# 成長から破綻へ―第一次世界大戦期から昭和金融恐慌に至るまでの加島銀行・藤田銀行・近江銀行―

結城武延（東北大学）

## 要旨

1927（昭和2）年に発生した昭和金融恐慌によって多くの銀行が廃業、または統合した。その過程で日本銀行は、多額の日銀特融を使って破綻銀行の債務を処理する一方、破綻銀行を厳しく査定し、その役員に対しては私財提供をも求めた。その中でも、規模が大きく、恐慌発生時に預金取り付けの額も甚大であった銀行が藤田銀行、近江銀行そして加島銀行であった。

先行研究において、藤田銀行と近江銀行の破綻と清算過程、加島銀行はその清算過程が明らかとなっている。本報告では、まず、これまで十分には明らかになっていない加島銀行の破綻の原因と過程について、『大同生命文書』（大阪大学大学院経済学研究科歴史準備室所蔵）や「特別融通書類（加島銀行）」（日本銀行金融研究所所蔵）等を用いて検討したい。

その上で、三銀行を比較検討することで、昭和金融恐慌と政府の対応が銀行に与えた影響を明らかにしたい。藤田家の機関銀行であった藤田銀行、資産家の共同出資の近江銀行、設立当初は廣岡家が所有していたが増資により一般株主も増加した加島銀行は、利害関係者の軽重も異なっており、清算・解散のあり方に相違があったことから、それが日銀や大蔵省の対応にも影響を与えたのである。